

宮崎県北部地域における大学図書館と公立図書館との連携 —地域課題としての認知症をテーマとして—

九州保健福祉大学
山内 利秋

はじめに

設置基準の異なる大学図書館と、公立図書館広く公共図書館が連携する事は、特に私立大学の場合では難しさがある。そうでありながらも今日、大学の「知」は広く市民に開放する事が求められ、地域連携は地方の大学にとっては生命線とも言える。大学図書館が地域課題に向き合った際に連携先を求めた場合、所在する自治体の図書館というのは自然の成り行きでもある。

近年、図書館が地域課題と相対する機会が増加しているのは、インクルーシブが求められている近年の公的機関の中で生涯学習との親和性が高いという事は理解しやすい。

こうした中で、認知症とその予防は超高齢化が進行した日本社会において最も重大な課題の一つであり、この視点において、医療福祉系大学である本学附属図書館の特色を活かした地域自治体の公立図書館との連携の模索を推進している。

認知症と図書館

認知症と生涯学習、図書館については近年注目されている分野である。一つは非薬物療法・予防としての過去の記憶を引き出す回想法や読書そのものの効果・アートなどの効果が挙げられる。またソーシャルインクルージョンやダイバーシティといった近年着目されている概念は生涯学習に最も親和性の高い事もあり、そうした中で図書館が認知症者とどう関わるかは、特に団塊の世代が超高齢化する 2025 年を前にして重要な課題となってきている。

超高齢社会と図書館研究会では『認知症にやさしい図書館ガイドライン』を発表し、図書館における認知症者への対応についてまとめている。この研究グループのメンバーの 1 人であり、認知症者と地域社会についての研究活動を実践してきた小川敬之氏は、2016 年当時九州保健福祉大学に所属しており、宮崎県内での認知症者への対応を促進可能な公共図書館との関係を模索していた。そうした中で、本学附属図書館でも認知症に関わるテーマコーナーを設置し、さらに延岡市立図書館との関係の構築を目指していた。

展示企画について

2016 年度末に大学附属図書館と小川氏らの推進があり、地元の公立図書館である延岡市立図書館との協働企画を行う事となった。発表者である山内は、生涯学習に関わる博物館学を専門としている事から延岡市図書館協議会のメンバーとなっており、この活動については市立図書館側から関与してきた。また小川氏とともに、図書館と同様に認知症を活動の課題としている博物館での活動を実践し、共同研究も行っている。小川氏が他大学へ転出した後は両図書館との間に立ち、企画展示を行っている立場にある。

2016 年度からの企画展示内容について挙げる。

「認知症を知る」展シリーズの内容

2016 年度 (同一内容を再構成して 2 回展示)

・認知症の現状への理解 (日本の高齢化と認知症有病者数)、認知症ケアについて考える。

2017 年度

・身体機能の衰え (フレイル・サルコペニア) と認知症について

・認知症介護の実例を知る。

2018 年度

- ・ 様々な認知症と症状、図書館・読書の効果。
- ・ 認知症の予防について。

2019 年度

- ・ 認知症チェック、気づき・評価。

※ 2019 年度内にあと 1 回開催予定。



2017 年度の展示より

課題と展望

この企画を推進していく過程で市立図書館のみならず自治体の高齢者福祉部局や地域包括支援センターといった教育委員会以外の首長部局・関連機関との関係性が構築されつつあり、今後はさらにその関係をいかに発展させていけるかが重要であると考えている。また、学内では認知症に関連する研究活動を行っている教員が複数いるものの、活動への参加は企画内容へのアドバイス程度に留まっている。市立図書館・大学附属図書館双方ともマンパワーには限界があるため、今後、長期・発展的に協働活動を展開していくには認知症関連研究を専門とする教員や、自治体高齢者福祉や福祉まちづくり・生涯学習全般に関わる部局・関連機関をも大きく巻き込んだ体制を構築していく必要があると考えている。